

ドイツ文学におけるノヴェレ理論の研究 (2)

—— ノヴェレ理論とロマンティカーたち ——

谷 崎 英 男

1. は し が き

筆者は前稿⁽¹⁾において、本論文の主題を明らかにし、「ノヴェレ理論」の古典的解釈としてヴィーラントとゲーテの見解を詳述した。そしてまとめとして、ヨーゼフ・クンツがあげたノヴェレのイデアールテュープスとしての4つの点、すなわち(1)斬新さの動機、(2)この現世において、現在起る事件、(3)社交界的な物語状況、(4)作者の一定の意図について論述した。今回は第2回目として、ノヴェレとロマン派の作家や批評家たちとの関係について、考察してゆきたいと思う。

2. F・シュレーゲルとノヴェレ

ベンノ・フォン・ヴィーゼは、ドイツにおいてノヴェレについての理論が、そもそも語りうるようになったのは、初期ロマン派以来のことであり、それにもっとも貢献したのはフリードリッヒ・シュレーゲル (Friedrich Schlegel) (1772-1829) であり、F・シュレーゲルの基礎的・根本的な洞察に比べれば、ドイツにおけるそれ以後のすべての見解は、末梢的な性格なものであるとまでいい切っている。⁽²⁾

F・シュレーゲルがノヴェレについて、もっともまとまった見解を明らかにしているのは、その論文『ヨハネス・ボッカチオの文学作品についての報告』

(Nachricht von den poetischen Werken des Johannes Boccacio) (1801年)においてであるが、最近あらたに発見され、ハンス・アイヒナー (Hans Eichner) によってロンドンで1957年に刊行された『文学手帳』(Literary Notebooks, 1797-1801)のなかにも、ノヴェレに関する多くの重要なアフォリズムが、ばらばらの形であるが見出されるので、それらを次に挙げてみよう。

「ノヴェレは心理学のない分析的なロマーンである。」(Novelle ist ein analytischer Roman ohne Psychologie.)

「ドン・キホーテはノヴェレの体系というよりは、むしろ連鎖である。多くのロマーンはもともと、ノヴェレの連鎖あるいは花輪にすぎない。ノヴェレはロマンティックな狂詩曲である。」(Don Quixote mehr eine Kette als ein System von Novellen. Viele Romane eigentlich nur Ketten oder Kränze von Novellen. Die Novelle ist eine romantische Rhapsodie.)

「ノヴェレは、精神が新しくさえあれば、字句は古くても差支えない。」(Novellen dürfen im Buchstaben alt sein, wenn nur der Geist neu ist.)

「ノヴェレを知らなければ、シェイクスピアの作品を、形式上から理解することはできない。」(Ohne Novellen zu kennen, kann man Shakespeares Stücke nicht verstehen der Form nach.)

「アリオスト、セルバンテスとシェイクスピア——おのおのは別な方法で、ノヴェレを詩化した。真のノヴェレはその存在と生成のどの点においても、新しく意外性のものでなければならない。」(Ariost, Cervantes und Shakespeare, jeder hat auf andere Weise die Novelle poetisiert. Die wahre Novelle muß in jedem Punkt ihres Seins und Werdens neu und überraschend sein.)

「ノヴェレには、上手に物語るという技術が、本当に必要である。」(Zu den Novellen gehört ganz eigentlich die Kunst gut zu erzählen.)

「ノヴェレは気のきいた事件である。事件はまた素朴で、ユーモアやカリカチュアがあってもよい。グロテスクなのは、もちろんのことである。」
(Eine Novelle ist eine witzige Begebenheit; auch Begebenheiten können naiv sein, Humor und Caricatur haben; grotesk, das versteht sich von selbst.)

「寓話、童話、聖譚は、芸術と教養によってノヴェレになりうる。それにはまた芸術の詩化が必要である。」(Fabel, Märchen und Legenden können durch Kunst und Bildung zu Novellen werden. Dahin gehört auch die Poesierung der Künste.)

「ノヴェレの基礎は逸話である。ほかのすべてのものは、後世の改造である。大抵のノヴェレは真実である。」(Der Grund der Novelle die Anekdote. Alles andre spätere Umbildung. Die meisten Novellen sind wahr.)

「ノヴェレは、ドラマと類似性をもっている。ちょうどロマンツェ（スペインで生れた民謡調物語詩）と叙情詩のように。同一性ではない。」(Novellen haben Affinität mit Dramen, wie Romanzen mit Lyrik, nicht Identität.)

「伝説、童話、ノヴェレは、現実生活にかかわっている。アラベスク、牧歌、聖譚はすべて詩的文学にすぎない。」(Sage, Märchen, Novelle gehen auf das wirkliche Leben; Arabeske, Schäfergedicht, Legende sind alle nur poetische Poesie.)

「童話と田園詩が、想像力と美に関係するように、アラベスクとノヴェレは、発明と改造に関連している。オペレッタがロマンティックであるように、ノヴェレはその性質から見ると、ドラマティックかも知れない。」(Wie Märchen und Idyllen sich auf Fantasie und Schönheit, so beziehen sich Arabesken und Novellen auf Erfindung und Umbildung. Wie die Operette romantisch, so vielleicht die Novelle dramatisch ihrer

Natur nach.)

「ノヴェレは上流社会の文学である。それゆえ、逸話である。」(Die Novelle ist die Poesie der guten Gesellschaft, daher Anekdote.)

また1798年初期ロマン派の機関紙であった『アテネウム』(Athenäum)の第1巻に発表された『アテネウム断章』(Athenäumsfragmente)のなかにも、次のような言説が見出される。

「堅牢で、詳細で、均整がとれているために、建築様式的とでも呼びたいような一種の才気というものが存在する。この才気が風刺的な現われかたをすると、本来のあてこすりになる。この才気はきちんとしていて体系的なものでなければならないが、また他方ではその必要もない。完璧であっても、支離滅裂にみえるように、何かが欠けているように見えなければならない。このようないびつなものが、おそらく実際に才気のなかで偉大なスタイルを作り出すであろう。それはノヴェレのなかでは、重要な役割を演じている。というのは、物語というものは、このようなただひたすら素晴らしい珍らしさによってのみ、永遠に新しい生命を保ちうるからである。」(Es gibt eine Art von Witz, den man wegen seiner Gediegenheit, Ausführlichkeit und Symmetrie den architektonischen nennen möchte. Äußert er sich satirisch, so giebt das die eigentlichen Sarkasmen. Er muß ordentlich systematisch sein, und doch auch wieder nicht; bei aller Vollständigkeit muß dennoch etwas zu fehlen scheinen, wie abgerissen. Dieses Barocke dürfte wohl eigentlich den großen Stil im Witz erzeugen. Es spielt eine wichtige Rolle in der Novelle: denn eine Geschichte kann doch nur durch eine solche einzig schöne Seltsamkeit ewig neu bleiben.)

「ノヴェレがその存在と生成のどの点においても、新しくびっくりするようなものでなければならないように、詩的な童話や特にロマンツェは、ひょ

っとして限りなく異様なものでなければならぬであらう。というのはノヴェレはただ想像力の注意を引こうとするばかりでなく、また精神をうっとりさせ、感情をも刺激しようとするからである。」(Wie die Novelle in jedem Punkt ihres Seins und ihres Werdens neu und frappant sein muß, so sollte vielleicht das poetische Märchen und vorzüglich die Romanze unendlich bizarr sein; denn sie will nicht bloß die Phantasie interessieren, sondern den Geist bezaubern und das Gemüt reizen.)⁽³⁾

そして最後に、前述の論文『ヨハネス・ボッカチオの文学作品についての報告』のなかでは、次のようにいっている。

「ノヴェレは、主観的な気分や見方を、しかもそのもっとも深く、もっとも独特なものを、間接的に、いわば象徴的に表現するのにとっても適していると、私は主張する。」(Ich behaupte, die Novelle ist sehr geeignet, eine subjective Stimmung und Ansicht, und zwar die tiefsten und eigenthümlichsten derselben indirect und gleichsam sinnbildlich darzubieten.)

「またこの主観的なものの間接的な表現のほうが、多くの場合、直接的な叙情的な表現よりも、ふさわしく適切であること、のみならず、この伝達の方法における間接的で、隠されたものこそが、表現に一層高い魅力を与えるであろうということを、示すのにはなんの論議を必要としない。同様にノヴェレ自身は、ちなみに客観的なものへの傾向を強くもっているために、ひょっとしたら特に、この間接的で隠された主観性にむいているかも知れない。」

(Auch bedarf es keiner Auseinandersetzung, um zu zeigen, daß diese indirecte Darstellung des Subjectiven für manche Fälle angemessener und schicklicher sein kann, als die mittelbare lyrische, ja daß gerade das Indirecte und Verhüllte in dieser Art der Mittheilung ihr einen höhern Reiz leihen mag. Auf ähnliche Weise ist die Novelle selbst

zu dieser indirecten und verborgenen Subjectivität vielleicht eben darum besonders geschickt, weil sie übrigens sich sehr zum Objectiven neigt.)

「ノヴェレは逸話であり、会合で物語るように、物語られたまだ知られていない物語であり、国家や時代への関連や、または人類の進歩とか、教養への関係とかを考えずに、それだけですでに、個々に興味をかならず起させることができる物語である。それゆえ、厳密に言えば、歴史には属せずに、イロニーへの萌芽を生れながらにしてこの世へ携えてきている物語である。その物語は興味を起させる目的があるので、その形式のなかに、多くの人びとにとって注目をひくか、好ましいと見込まれる何物かを、持っていなければならない。物語の技術がすこし向上しさえすれば、作者はその技術を示そうとするであろう。そうなれば、作者は取るに足らないものでも好ましいもの、つまり逸話（といっても正確に言えば、逸話ですらないもの）でもって、見せかけで楽しませたり、また一般には取るに足らないものでも、豊かな技術によって、有りあまるほど飾りたてることができるので、われわれは、みずから進んでだまされたり、さらには真剣にそれに興味を感じさせられたりするのである。」(Es ist die Novelle eine Anekdote, eine noch unbekannte Geschichte, so erzählt, wie man sie in Gesellschaft erzählen würde, eine Geschichte, die an und für sich schon einzeln interessieren können muß, ohne irgend auf den Zusammenhag der Nationen, oder der Zeiten, oder auch auf die Fortschritte der Menschheit und das Verhältnis zur Bildung derselben zu sehen. Eine Geschichte also, die streng genommen, nicht zur Geschichte gehört, und die Anlage zur Ironie schon in der Geburtsstunde mit auf die Welt bringt. Da sie interessieren soll, so muß sie in ihrer Form irgend etwas enthalten, was vielen merkwürdig oder lieb sein zu können verspricht.

Die Kunst des Erzählens darf nur etwas höher steigen, so wird der Erzähler sie entweder dadurch zu zeigen suchen, daß er mit einem angenehmen Nichts, mit einer Anekdote, die genau genommen, auch nicht einmal eine Anekdote wäre, täuschend zu unterhalten und das, was im Ganzen ein Nichts ist, dennoch durch die Fülle seiner Kunst so reichlich zu schmücken weiß, daß wir uns willig täuschen, ja wohl gar ernstlich dafür interessieren lassen.)

さて以上のような、時には一見矛盾するようなF・シュレーゲルの様々な考えを、どのように解釈すべきであろうか。F・シュレーゲルがまず第一に強調するのは、ノヴェレの実在性、客観性であり、彼はこの基礎を依然として、イデアールテュープスの1つに述べた社交界的な物語情況、社交界的な性格に置いている。前記の「ノヴェレの基礎は逸話である。ほかのすべてのものは、後世の改造である。大抵のノヴェレは真実である」「ノヴェレは上流社会の文学である。それゆえ、逸話である」「ノヴェレは逸話であり、会合で物語るように、物語られたまだ知られていない物語である」というような評言は、明らかにこのことを示している。なおここで付言したいことであるが、逸話 (Anekdote) という言葉は、当時はまだジャンルの名称としては用いられておらず、たんに「未知な事件」(unbekannte Begebenheit), 「新しい小話」(neues Geschichtchen) を意味していたことである。⁽⁴⁾ すなわちノヴェレは、特別な新しい出来事を伝えることによって、もっぱら直接的に孤立した個々の事件に関心をもつ読者をひきよせるのである。従って報告された事件は「歴史に属さない事件であり」「国家や時代への関連や、または人類の進歩とか、教養への関係とかを考えずに、それだけですぐに、個々に興味をかならず起させることができる物語」なのである。かくして客観的に物語られた事件を切り離して強調すること、事件が人物や物事に対する優位を占めることが、ノヴェレの構成の1つの要素になるのである。

ところが、F・シュレーゲルはまた別の面でノヴェレの主観的な表現形式をしきりに論じている。

前記の「ノヴェレは、主観的な気分や見方を、しかもそのもっとも深く、もっとも独特なものを、間接的に、いわば象徴的に表現するのにとっても適している」「ノヴェレには、上手に物語るという技術が、本当に必要である」「ノヴェレはその存在と生成のどの点においても、新しくびっくりするようなものでなければならぬ」「(ノヴェレは)その形式のなかに、多くの人びとにとって注目をひくか、好ましいと見込まれる何物かを、持っていなければならない」というような所説は、このことを明らかにしている。このような「形式」(Form)の強調は、F・シュレーゲルがボッカチオに従ってなお固執していた社交界的な性格とは、明らかに矛盾するものであるが、ここにおいてノヴェレは内容よりも、むしろ形式が重視され、社交的な会話と気の利いた遊びとしての技術以上のものに変質したといえるであろう。

さてこのようなノヴェレにおける客観的なものと、主観的なものとのあいだにおける緊張関係は、今日に至るまで、ノヴェレ理論の中心をなすものであるが、フォン・ヴィーゼによると、真実の事件を物語りながら、同時に事件の歴史的関連を切り離して、個々のケースを芸術的に孤立させるというノヴェレのもつ2重性こそ、ロマン主義と写実主義というようなまったく相反する時代に、その盛期を迎えられたジャンルになりえた理由であるという。⁵⁾ そのことはともかく、以上述べたことから考えても、F・シュレーゲルによって、ノヴェレについての理論の本当の第1歩が、踏み出されたことは明らかであろう。ついでF・シュレーゲルの兄A・W・シュレーゲルとノヴェレについての考察に移ろう。

3. A・W・シュレーゲルとノヴェレ

アウグスト・ヴィルヘルム・シュレーゲル (August Wilhelm Schlegel) (1767-1845) がノヴェレについて言及しているのは、彼の『文学と美術についての講義』(Vorlesungen über schöne Literatur und Kunst) (1801-1804) においてであるが、その第3部のなかには、次のような所説が見出される。

「それゆえ、近代文学のなかにも、その価値が本来の歴史のなかには席を占めてはいないにもかかわらず、一般的に興味のあることを物語る点にある、1つの特別に歴史的なジャンルがなければならない。歴史の対象は、人類の前進する活動であるが、後者のジャンルの対象は、それゆえたえず生起すること、この世の日常の成行、もちろん記載するに値することになるであろう。このことをもくろむジャンルがノヴェレである。そしてこのことから、ノヴェレが本物であるためには、一方ではその珍奇な無類性によって目を引かなければならないが、また他方では一種の普遍妥当性をもっていなければならないことが理解される……。ノヴェレは、実際に起った物事の経験を伝えようとするものであるから、ノヴェレにもともと本質的に固有な形式は散文である。」(Deswegen muß es nun auch in der modernen Poesie eine eigenthümlich historische Gattung geben, deren Verdienst darin besteht, etwas zu erzählen, was in der eigentlichen Historie keinen Platz findet, und dennoch allgemein interessant ist. Der Gegenstand der Historie ist das fortschreitende Wirken des Menschengeschlechts; der jener wird also dasjenige seyn, was immerfort geschieht, der tägliche Weltlauf, aber freylich damit er verdiene aufgezeichnet zu werden, Die Gattung, welche sich dieß vornimmt, ist die Novelle, und hieraus läßt sich einsehen, daß sie, um ächt zu seyn, von der einen Seite durch seltsame Einzigkeit auffallen, von der andern Seite

eine gewisse allgemeine Gültigkeit haben muß, Da nun die Novelle Erfahrung von wirklich geschehenen Dingen mittheilen soll, so ist die ihr ursprünglich und wesentlich eigne Form die Prosa.)

「ノヴェレは、物語の主要部分がはっきり目につくように、決定的な転回点を必要とする。そしてドラマにもまた、このことが必要である。」(Die Novelle bedarf entscheidender Wendepunkte, so daß die Hauptmassen der Geschichte deutlich in die Augen fallen und dieß Bedürfnis hat auch das Drama.)

「ノヴェレを巧みに物語るためには、物語のなかへ入ってくる日常的なものを、できるだけ短く処理しなければならない。そしてそれを不当に飾りたてようとはせず、もっぱら異常なもの、無類なものに固執しなければならない。しかしながらまたこれを動機づけて解剖したりはせず、それを積極的に提示して、信じさせなければならない。」(Um eine Novelle gut zu erzählen, muß man das alltägliche, was in die Geschichte mit eintritt, so kurz als möglich abfertigen, und nicht unternehmen es auf ungehörige Art aufstutzen zu wollen, nur bey dem Außerordentlichen und Einzigem verweilen, aber auch dieses nicht motivierend zergliedern, sondern es eben positiv hinstellen, und Glauben dafür fordern.)

「政治史は、精神の緊張を要求するきわめてまじめな研究である。ノヴェレは政治史の文学的な対立物として、むしろもっぱら気晴らしにささげられている。談話は、見せかけが楽しいものでなければならず、教訓は、ひとりでに生じなければならない。社会生活の経験は、社交界においてもっとも人氣があり、ふさわしい会話の1つである。それゆえ、ノヴェレの朗読に対する本来の原型は、教養のある社交的な物語作者である。」(Die politische Historie ist ein sehr ernstes Studium, welches Anstrengung des Geistes fordert; die Novelle, als ein poetisches Gegenbild derselben, ist

vielmehr der Erholung gewidmet, die Unterhaltung muß in der Erscheinung oben auf seyn, und die Belehrung sich nur von sich selbst einstellen. Die Erfahrungen des geselligen Lebens sind eine der beliebtesten und angemessensten Unterhaltungen in der Gesellschaft; deswegen ist das eigentliche Muster für den Vortrag der Novelle der gebildete gesellige Erzähler.)

「ノヴェレは、悲劇的な破局を伴ったまじめな事件から、単なる茶番まで、どんな調子のものにも加わることができる。しかしながら常にノヴェレは、現実の世界に住いを定めていなければならない。それゆえ、ノヴェレはまた、場所や時間、人物の名前を決めて挙げることを好むのである。したがって、ノヴェレは一般に人間を、その自然状況によって、つまりすべての弱点や、情熱や、浄化されていない自然に結びつく利己的な衝動をもったものとして、取り上げなければならない。ノヴェレは、世の成行をあるがままに、描くべきである。だから一般にモチーフを、過度に高尚なものにしてはならない。」(Die Novelle kann von ernstern Begebenheiten mit tragischer Katastrophe bis zur bloßen Posse alle Töne durchlaufen, aber immer soll sie in der wirklichen Welt zu Hause seyn, deswegen liebt sie die ganz bestimmten Angaben von Ort, Zeit und Namen der Personen. Daher muß sie den Menschen in der Regel nach seinem Naturstande nehmen, d. h. mit allen den Schwächen, Leidenschaften und selbstischen Trieben, welche der ungeläuterten Natur anhängen. Sie soll den Weltlauf schildern, wie er ist; sie darf also die Motive im allgemeinen nicht über Gebühr veredeln.)

「ノヴェレは歴史の外の物語である。ノヴェレは従って、いわば市民的な体制や規定の背後で起った注目すべき事件を物語るのである。これに属するものは一部は、幸運だったり不運だったりする奇妙な運命のめぐりあわせや、

また一部は、情熱を満足させるために企てられた悪がしこいいたずらである。前者が主として悲劇的でまじめなノヴェレになり、後者がこっけいなノヴェレになるのである。」(Die Novelle ist eine Geschichte außer der Geschichte, sie erzählt folglich merkwürdige Begebenheiten, die gleichsam hinter dem Rücken der bürgerlichen Vefassungen und Anordnungen vorgefallen sind. Dazu gehören theils seltsame bald günstige bald ungünstige Abwechselungen des Glücks, theils schlaue Streiche, zur Befriedigung der Leidenschaften unternommen. Das erste giebt hauptsächlich die tragischen und ernsten, das letzte die komischen Novellen.)

このようなA・W・シュレーゲルの言葉を考察すると、基本的には弟のF・シュレーゲルの線に沿っていることは、明白であろう。ちなみに両者がほとんど同じような意味のことをいっている言葉をあげてみよう。まずノヴェレの社交会的性格について、F・シュレーゲルは「ノヴェレは上流社会の文学である」「ノヴェレは会合で物語るように、物語られたまだ知られていない物語である」といい、A・W・シュレーゲルは、「ノヴェレの朗読に対する本来の原型は、教養のある社交的な物語作者である」といっている。さらにノヴェレの客観性を強調して、F・シュレーゲルはノヴェレは「歴史に属さない物語」であるといい、A・W・シュレーゲルはノヴェレは「歴史の外の物語である」といっている。またノヴェレの現世性を強調して、F・シュレーゲルは「ノヴェレは、現実生活にかかわっている」といい、A・W・シュレーゲルは「常にノヴェレは、現実の世界に住いを定めていなければならない」と述べている。そしてさらにはノヴェレの主観的側面を強調して、F・シュレーゲルは「ノヴェレはその存在と生成のどの点においても、新しくびっくりするようなものでなければならない」「(ノヴェレは)その形式のなかに、多くの人びとにとって注目をひくか、好ましいと見込まれる何物かを、持っていなければならない」といい、A・W・シ

シュレーゲルは、「ノヴェレを巧みに物語るためには、物語のなかへ入ってくる日常的なものを、できるだけ短く処理しなければならない。そしてそれを不当に飾りたてようとはせず、もっぱら異常なもの、無類なものに固執しなければならない」と述べている点などである。このような両者の類似した見解は、両者のノヴェレについての考えが、原則的に同一線上にあることを証するものといえよう。

ただ一点兄シュレーゲルが、弟シュレーゲルを超えて貢献し、その後のノヴェレ理論に大きな問題を提供したのは、「ノヴェレは、物語の主要部分がはっきり目につくように、決定的な転回点（Wendepunkte）を必要とする」と述べて、転回点という新しい概念を導入したことである。彼は「ドラマにもこの要求がある」といい、漸層的進展を求めるロマーンに対して、「単に人物相互間の内面的関係における、かすかなゆるやかな進展と変化だけでは、すまされず」「ノヴェレには、ずぶとくてエネルギー的な風俗の特性が好ましい」と述べている。

この転回点の理論は、さらにティークによって受けつがれて発展して行くのであるが、そのことについては、次の項であれて行きたいと思う。

なおここで、フォン・ヴィーゼに従って、ドイツ・ロマン派のノヴェレ理論の特色ともいべき点を指摘しておきたい。⁽⁵⁾ それはA・W・シュレーゲルが「世の成行についての経験を伝達し、物事を実際に起ったこととして物語ること」

（Erfahrungen über den Weltlauf mitzuteilen und etwas als wirklich geschehen zu erzählen）を、ノヴェレの本来の目標と見做したように、ロマーンの空想の魅力に対立させて、現実性の内容をもったものとして、ノヴェレを対置させていることである。従って19世紀のドイツにおいては、ヨーロッパのほかの国では、ロマーンの主要な傾向と思われるものを、ノヴェレが引き受け、ロマーンはドイツでは、ゲーテの『ウィルヘルム・マイスターの修業時代』

（Wilhelm Meisters Lehrjahre）という有力な規範と、このロマーンに結び

ついたロマン派のロマン理論によって、完全に内面生活と内面的発展の過程の叙述へと押しやられてしまったのである。これに反して、ノヴェレにおいては、ロマン派においても、真実な事件と社交界の状況の意識が例外なく保持されていたことは、注目すべきことであろう。

4. ティークとノヴェレ

ルートヴィヒ・ティーク (Ludwig Tieck) (1773-1853) がノヴェレについて述べているのは、その著作集の11巻のなかの『第3分冊への序言』(Vorbericht zur dritten Lieferung) においてで、彼は次のように書いている。

「われわれは現在、ノヴェレという言葉で、すべての特に比較的短い物語に対して用いている。作家のなかには、これから持ち出そうとする話が、大して重要でないように見えるときに、このノヴェレという名称を、申し訳的に使用する人もいるようだ。われわれには、ロマンという名前で呼ぼうとしているものは、かなりよく分っている。しかしイギリス人は、ずっと前からすべてのロマンを、ノヴェレと称している。ノヴェレという言葉が、まずイタリア人のあいだに登場したときには、おそらく新しくまだ知られていなかったすべての物語、すべての事件のことであったであろう。この名称は引き続き使用され、イタリア人の作り出す作品の多くは、下品で、猥雑で、好色なところに特色があった。陽気に、しばしば道徳的感情などは一切なしに行なわれる淫猥、姦通、誘惑、またひんぱんに出てくる痛烈な風刺や、聖職者(かれらは、ボッカチオ以来、優位に立とうとすればするほど、気のきいた人たちの嘲笑の対象になっていた)の嘲弄が、これらのイタリアのノヴェレの大部分の内容である。セルバンテスが、きびしい教会の秩序のもとにあったスペインの礼儀正しい国民に、ノヴェレというジャンルを提供しようとしたときには、それがこのようなイタリア的な色調のものではない、ということを示すために、このいまわしいタイトルのかたわらに、『道徳的な』と

いう形容詞を、付け加えざるをえなかったのである。

ボッカチオ、セルバンテスおよびゲーテは、以前からこのジャンルのひな形的な作家になっており、われわれは、この様式において完全なものとして見なしうる典型にならって、ノヴェレという言葉をもっと正しく、事件や、話や、物語や、出来事や、逸話と同意語として、用いるべきではないであろう。…ノヴェレは、大小にかかわらず、どんなにたやすく起りうるとしても、不可思議で、唯一無比な事件を、はっきりと見せることによって、前記の手本通りに、ほかの課題から区別されるであろう。この話の転回、この話が思いがけずに完全に、逆転はするが、性格と状況に応じて、話の筋を自然に発展させる点こそ、事柄そのものは、不可思議なものの中においてさえ、事情が違えば、ありふれたことになりうるのであるから、読者の想像力に一層強く印象づけられるであろう……。

1例を想起するならば、あのゲーテの『避難ドイツ人たちのまどい』のなかのノヴェレにおいて、若者⁶⁾がお金を手に入れるために、しばらくあずかって利用する錠のきかなくなった勘定台は、このような日常茶番事的ではあるが、不可思議な事件で、またほとんど無用な時に起る若者の改悛と改心も同様である。……セルバンテスのノヴェレには、どれにもこのような中心点が存在する。

真正のノヴェレは、珍妙なものでも、がんこなものでも、幻想的なものでも、軽くおどけたものでも、くだらないおしゃべりでも、枝葉末節の描写に夢中になっているものでも、悲劇的なものでも、喜劇的なものでも、深遠なものでも、ひょうきんなものでも、あらゆる色合いと性格をこばまない。ただ真正のノヴェレは、ほかの物語のすべてのジャンルから区別される、あの異常な目をひく転回点を、つねにもっているであろう。」(Wir brauchen jetzt das Wort Novelle für alle, besonders kleineren Erzählungen; manche Schriftsteller scheinen sogar in diese Benennung eine Ent-

schuldigung legen zu wollen, wenn ihnen selbst die Geschichte, die sie vortagen wollen, nicht bedeutend genug erscheint. Was wir mit dem Roman bezeichnen wollen, wissen wir jetzt so ziemlich; aber der Engländer nennt schon seit lange alle seine Romane Novelln.

Als das Wort zuerst unter den Italiänern aufkan, sollte es wohl jede Erzählung, jeden Vorfall bezeichnen, die neu noch nicht bekannt waren. So wurde der Name fortgebraucht, und die Italiäner zeichneten sich dadurch aus, daß ihre meisten Geschichten, die sie gaben, anstößig, obscön oder lüsten waren. Unzucht, Ehebruch, Verführung, mit listigem Geist, sehr oft ohne alles moralisches Gefühl vorgetragen, nicht selten bittre Satyre und Verhöhnung der Geistlichen, die seit Boccac, um so mehr sie regieren wollten, um so mehr von den Witzigen verspottet wurden, ist der Inhalt der meisten dieser Novellen.

Als Cervantes seinem züchtigen Volke, das unter einer strengen geistlichen Polizei stand, Novellen geben wollte, mußte er diesem ärgerlichen Titel das Beiwort moralisch hinzufügen, um anzuzeigen, daß sie nicht im Tone jener italiänischen seyn sollten. Boccac, Cervantes und Göthe sind die Muster in dieser Gattung geblieben, und wir sollten billig nach den Vorbildern, die in dieser Art für vollendet gelten können, das Wort Novelle nicht mit Begebenheit, Geschichte, Erzählung, Vorfall, oder Anecdote als gleichbedeutend brauchen.

Die Novelle [sollte] nach jenen Mustern sich dadurch ans allen andern Aufgaben hervorheben, daß sie einen großen oder kleinern Vorfall in's hellste Licht stelle, der, so leicht er sich ereignen kann, doch wunderbar, vielleicht einzig ist. Diese Wendung der Geschichte, dieser

Point, von welchem aus sie sich unerwartet völlig umkehrt, und dem Charakter und den Umständen angemessen, die Folge entwickelt, wird sich der Phantasie des Lesers um so fester einprägen, als die Sache, selbst im Wunderbaren, unter andern Umständen wieder alltäglich sein könnte.

Um uns an ein Beispiel zu erinnern. So ist im jener Göthischen Novelle in den Ausgewanderten, der sich aufhebende Ladentisch, der das Schloß überflüssig macht, welches der junge Mann eine Zeitlang benutzt, um sich mit Geld zu versehen, ein solcher alltäglicher und doch wunderbarer Vorfall, eben so wie die Reue und Besserung des Jünglings, die in eine Zeit fällt, daß sie fast unnütz wird.; in jeder Novelle des Cervantes ist ein solcher Mittelpunkt. Bizarr, eigensinnig, phantastisch, leicht witzig, geschwätzig und sich ganz in Darstellung auch von Nebensachen verlierend, tragisch wie komisch, tiefsinnig und neckisch, alle diese Farben und Characteres läßt die ächte Novelle zu, nur wird sie immer jenen sonderbaren auffallenden Wendepunkt haben, der sie von allen andern Gattungen der Erzählung unterscheidet.)

さて、以上のようなティークのノヴェレに対する見方は、今まで述べてきたようなヴィーラント以来の伝統的な見解に沿っていることは、明らかであり、また「ノヴェレは、大小にかかわらず、どんなにたやすく起りうるとしても、不可思議で、唯一無比な事件を、はっきりと見せることによって」他の物語ジャンルと区別されるべきであるといつて、シュレーゲル兄弟の見解にも沿っている。ティークが、ノヴェレ理論に新たな寄与をしたとするならば、それは「真正のノヴェレは、ほかの物語のすべてのジャンルから区別される、あの異常な目をひく転回点」をもたねばならない、とした点であろう。転回点 (Wende-

punkt) という言葉は、すでに A・W・シュレーゲルが使用しているが、彼は「ノヴェレは、物語の主要部分がはっきりと目につくように、決定的な転回点を必要とする」(Die Novelle bedarf entscheidender *Wendepunkte*, so daß die Hauptmassen der Geschichte deutlich in die Augen fallen.) といい、Wendepunkte と複数形を用いている。これに対して、ティークは *jenen sonderbaren auffallenden Wendepunkt* と単数形を用いている。ヒンメルによると、このような、複数の転回点から 1 つの転回点への縮小には、深い意味が含まれているという。^[7]つまり、シュレーゲルは、包括的な叙述の補助手段としてあげているだけで、挿話的な事件をおたがいから目立たせるためのものであるが、ティークは、構成の標識、すなわち「ほかの物語のすべてのジャンル」から区別するメルクマルとして、転回点を見ているのである。この「転回点」という概念は、さらに「ノヴェレ理論」の発展において、様々な形で登場するので、またそれぞれの段階において触れて行くであろう。

5. シュライヤーマッハーとノヴェレ

ロマンティカーの最後の人として、作家というよりは、むしろ哲学者、あるいは神学者であるフリードリッヒ・シュライヤーマッハー (Friedrich Schleiermacher) (1768-1834) の所説に目を向けよう。シュライヤーマッハーは、1809年に、ベルリンの三位一体教会 (Dreifaltigkeitskirche) の牧師になったが、1810年創立のベルリン大学の教授を兼ね、1819年、1825年、1832年から1833年にかけて、「美学」(Ästhetik) についての講義を行なっている。この講義は、彼の死後、娘むこのロマツシュ (C. G. Lommatzsch) の手によって印刷されたが、さらにオーデブレヒト (R. Odebrecht) によって新たに編集された。^[8]

シュライヤーマッハーは、ノヴェレの特性に触れて、次のようにいっている。

「作家は、とくに、物語の中には、あまり多くのものは含まれていないので、必然的に何物を挿入するか、言語による特有な名人芸を発揮しなければならない。これがノヴェレの真の本源的な本質であり、そのような場合、個々の事件の中で、つねに人生の一側面が全的に表現されることは、いうまでもない。」(Der Dichter muß besonders, weil in der Erzählung nicht viel liegt, notwendig etwas hineinlegen oder besondere Virtuosität durch die Sprache entwickeln. Das ist das eigentliche ursprüngliche Wesen der Novelle, wobei sich von selbst versteht, daß im einzelnen Vorfälle sich immer eine ganze Seite des Lebens darstellt.)

また、ロマーンとノヴェレの相違について、次のように述べている。

「素材に関していえば、逸話に基礎をおくノヴェレの領域は、独自のもので、英雄伝説に基づくものは、別種であるように思われる。英雄伝説は、公的な生活を目ざしている。というのは、ここでは影響力の強大な人物が取り扱われているからである。しかしそれは、英雄の生活そのものであることによって、私的生活へと引きもどされる。けれどもこの場合、ノヴェレとの相違があり、英雄伝説的なものはすべて、類似性をもっている。またここでは、人的な描写が行動の描写の下に置かれることも、行なわれる。ロマーンに注目するならば、この点では逆でなければならない。特色を示すものが主題であるべきであり、事件はただ、その中で特色が示されるものでなければならない。……ロマーンは、歴史の叙述に極めて近い存在であり、もともと歴史叙述を補完するものだけであるべきであろう。そうとすれば、ロマーンは、芸術の一定の地位を占めている。」(In Beziehung auf den Stoff erscheint das Gebiet der Novelle, welches auf der Anekdote beruht, als ein eigenes, und was auf der Heldensage beruht, als ein anderes. Die Heldensage geht auf das öffentliche Leben hinaus, denn es wird hier eine einflußreiche Person behandelt; doch wird es zum Privatleben

zurückgeführt, indem es das Leben des Helden für sich ist; doch ist hier ein Unterschied von der Novelle und es hat alles Heroische eine Ähnlichkeit. Es findet hier auch die Unteordnung der persönlichen Darstellung unter die Darstellung der Handlung statt. Sehen wir auf den Roman, so soll es hier umgekehrt sein. Das Charakteristische soll die Hauptsache sein und die Begebenheit soll nur das sein, worin sich der Charakter entwickelt. Der Roman steht der Geschichtsschreibung sehr nahe, daß eigentlich nur als Ergänzung derselben sein sollte und dann steht er auf einem bestimmten Platze der Kunst.)

ヘンリエット・ヘルツ (Heriette Herz) (1764-1847) のサロンを通じて、シュレーゲル兄弟や、ティークと親交のあったシュライヤーマッハーの考えが、シュレーゲル兄弟の見解と軌を一にしていることは、当然考えられるところであり、またノヴェレのジャンルの美学的考察は、またその後、さまざまな発展をとげるので、それぞれの個所で触れるであろう。

6. ま と め

以上、シュレーゲル兄弟から、ティークをへて、シュライヤーマッハーまで、ロマンティカーたちのノヴェレについての見解について論述したが、フォン・ヴィーゼのいうように、ロマンティカーたち、特にF・シュレーゲルとティークが、ノヴェレ理論の発展に大きな刺激を与えたことは、明らかであろう。シュレーゲルは、前述のように、「ノヴェレの基礎は、逸話である。……大抵のノヴェレは真実である。」といい、また「ノヴェレは上流社会の文学である。それゆえ、逸話である。」といって、ノヴェレと逸話が、本源的には社交の楽しみのために、物語られる事件を取扱う点で共通点をもっていることを指摘して、その「客観的な異常さ」(objektive Merkwürdigkeit) に注目している。しかしながら一方では、「作者は取るに足らないものであっても好ましいもの、

つまり逸話（といっても正確に言えば、逸話ですらないもの）でもって、見せかけで楽しませたり、また一般には取るに足らないものでも、豊かな技術によって、有りあまるほど飾りたてることができるので、われわれは、みずから進んでだまされたり、さらには真剣にそれに興味を感じさせられたりするのである。」といて、ノヴェレの「主観的な形成形式」(subjektive Gestaltungsform)を強調している。

このことは、前稿『ノヴェレ理論の研究(1)』で指摘したように、すでにゲーテ自身も触れている所であるが、F・シュレーゲルは、さらに進んで「ノヴェレは、その存在と生成のどの点においても、新しくびっくりするようなものでなければならない」「ノヴェレには、上手に物語るという技術が、本当に必要である」といい、物語の技術においては、「何が」(das Was) すなわち素材よりも、「いかに」(das Wie) すなわち方法の方が、重要であることをくりかえし説いている。この点にこそまさに、F・シュレーゲルによって、ボッカチオ風の古きノヴェレから、新しいロマン派の理論への橋渡しが行なわれたと考えられるべきであって、彼の一大貢献といわなければならない。なぜなら、フォン・ヴィーゼも指摘するように、F・シュレーゲルのような洞察は、決して単に歴史的なものではなく、直接にしる、間接にしる、その後のノヴェレの研究に、影響を及ぼしているからである。

一方ティークの貢献は、A・W・シュレーゲルとともに、「転回点」という新しいカテゴリーを導入したことであろう。この転回点については、マンフレート・シュニヒト (Manfred Schunicht) が、シュリングの弟子で、後にベルリン大学の美学の教授になったゾルガー (K. W. F. Solger) の理論によって、ティークが感化されたかを明らかにしている。⁽⁹⁾ しかしながらフォン・ヴィーゼは、このような構成上の原理を強調するあまり、どのノヴェレの中でも、この「転回点」がどこにあるかを、きちようめんにさがし求めることは、愚かしいことであるといっているが、全く同感せざるをえない。

さて、ロマン派の作家や批評家、特にF・シュレーゲルと、ティークによって、新たな発展をとげたノヴェレ理論は、次のビーダーマイヤー時代、およびそれにつづくリアリズム時代に、どのような変貌をみせるであろうか、それが次稿の主題である。

注(1) 『ドイツ文学におけるノヴェレ理論の研究(1)』(『早稲田商学』261号)

(2) Benno von Wiese: *Novelle*

(3) この項に限り Wolfdietrich Rasch 編集の Friedrich Schlegel: *Kritische Schriften*, 1971年によっているので、現代風の書法になっている。

(4) Benno von Wiese: *Novelle*

(5) Benno von Wiese: *Die deutsche Novelle von Goethe bis Kafka*

(6) 『避難ドイツ人たちのまどい』のなかで語られる第5話『若きフェルディナントの迷い』(*Die Verwirrung des jungen Ferdinand*) のなかにてでくる青年フェルディナントを指す。

(7) Helmut Himmel: *Geschichte der deutschen Novelle*

(8) Friedrich Schleiermachers *Ästhetik*. Hrsg. v. Rudolf Odebrecht

(9) Manfred Schunicht: *Der „Falke“ am „Wendepunkt“*. Zu den Novellentheorien Tiecks und Heyses